

「郷土舞踊 古念仏踊り」

坂本 要

小念仏踊り・おしゃらく・万作

踊りは一般に「おしゃらく」といわれているもので関東一円に広まっていた。この手の芸能は現在、東京都葛飾区や千葉県浦安市や鎌ヶ谷市で無形民俗文化財に指定されている。念仏講のあとの余興の踊りで普通「小念仏」の字を書くが、この地区では「古念仏」の字を使っていたようで、近くの柴崎（旧新利根村・現稲敷市）の報告（『新利根村史3』新利根村一九七四）にも「古念仏踊り歌詞」となっている。もともと念仏講のあとの余興から発達した芸能で「念仏踊り」「小念仏踊り」の名が使われるが、一遍や時宗・融通念仏宗の踊り念仏との関係はない。江戸後期の天保年間くらいから流行りだし、明治時代・大正時代が最盛期であった。踊りの伴奏に念仏鉦や太鼓が用いられているのはその面影からで、ところによつては歌詞のはじめに「帰命頂礼」最後に「南無阿弥陀仏」をいれる。「おしゃらく」いうのは普段着でなくはでな色や柄の着物で踊る「しゃれ着」から由来するとされている。この映像でも男女とも片袖の鉢巻姿で踊っている。埼玉県ではこのような踊りを「万作踊り」という年の初めや収穫後に豊年万作を願ったり・祝ったりして踊るもので、この映像も一九三一（昭和六）年正月五日の撮影である。

演目の歌詞はめでた歌のものが多く「高砂」はその定番である。歌舞伎・浄瑠璃・祭文を題材にしたものを口説きのように歌うもので、音頭とりに「おいとこそうだよ」のような合いの手が入る。踊りは単純なものだが、二人・四人と組んで踊る手踊りである。

稲敷郡高田村浦向

高田村浦向（うらむかい）は茨城県稲敷郡の村であったが、その後江戸崎町桑山字浦向に変わり、さらに二〇〇五年よりは稲敷市に属している。映像のキャプションは裏向になつてゐるが誤記と思われる。旧高田村の南端に位置し、利根川の河岸段丘の下沿いにある村である。冒頭の裏向の映像も利根川側から写したもので背後は河岸段丘である。下総の成田・神崎から土浦方面に通じる坂の上り口にあたり、宿屋が二、三軒あった。現在高速圏央道の稲敷東インターの出入り口にあたる所になつてゐるが、往年の面影が残つてゐる。撮影された場所は旧金毘羅神社境内か農家の庭に幔幕を張り莫塵を敷いたものと思われる。このあたりは小念仏踊りが盛んで、旧桜川村の浮島・旧新利根村の柴崎・旧江戸崎町佐倉に歌詞帖が残つてゐる。（河野弘『茨城の小念仏』筑波書林 一九八一）念仏講の余興として発達したといつたが、セミプロ化して演芸として行ない、農閑期に一座を組み近隣を興行するようになった。この映像も踊りのうまさや着付けから見ると浦向の地の人の踊りではなく河内町等の他地区の一座の可能性が高い。柴崎では小念仏を旧新利根村堀川の祭文語りから教わつたと伝えている。

踊りと演目

映像の演目・演者のキャプションは以下のようになっている。

高砂 横踊

清姫踊 北方

葛の葉子別 四ツヘラシ

白増粉屋娘 白増踊

八百やお七 飴屋踊

下座師 高仲竹次郎 海保忠吉 平野七蔵

踊り手 土肥すき子 土肥定吉 高仲たい子 海保八重子

田仲よね子 田丸みき子 伊藤つね子 篠田誠 柳町添作

楽器は念仏鉦2・念仏太鼓2・四ツ竹・飴屋太鼓である。演目の歌詞は「高砂」がめでた歌・「清姫踊」は道成寺の安珍清姫から、「葛の葉子別」は信太妻の葛の葉子別れから、「八百屋お七」を始め、それぞれの歌舞伎・浄瑠璃・祭文から題材をとったものである。特に「八百やお七」は飴屋歌からの流入で伴奏に飴屋太鼓を使っている。「白増粉屋娘」は千葉県芝山町白枘の粉屋の娘を歌ったもので天保の頃から印旛沼周辺で流行った歌である。

静止画像キャプション

time038 ①裏向の遠景 利根川河岸段丘下に立ち並ぶ家

time057 ②楽器 念仏鉦・三味線を使用する。

Time655 ③踊りの様子 片袖・鉢巻で踊る。